
国際シンポジウム

フェニキア考古学から見た古代オリエント

The View of Ancient Orient from the Standpoint of Phoenician Archaeology

日程：2011年11月12日（土）

場所：世田谷キャンパス 34号館 B304 教室

コーディネーター：岡田 保良（国士舘大学イラク古代文化研究所）

2011年11月12・13日と国士舘大学 世田谷・梅ヶ丘校舎において、国士舘大学 アジア・日本研究センターが主催して国際シンポジウム「フェニキア考古学から見た古代オリエント」が開催された。これは、科学研究補助金・基盤研究（A）研究課題番号20251007「フェニキア・カルタゴから見た古代の東地中海」（研究代表：泉拓良（京都大学））によるプロジェクトの一部を構成し、日本ではあまり著名とは言えないフェニキア・カルタゴ考古学の啓蒙的役割を果たすものであった。海外からはアハメッド・フェルジャウイ（チュニジア考古学研究所）、ジョアキーノ・ファルソーネ（イタリア、パレルモ大学）ハッサン・バダウイ（レバノン大学）、ナーデル・シクラウイ（レバノン考古総局）、パオラ・スコンツォ（エベルハルド・カールズ大学）が参加する予定であった。しかし、チュニジアの政治的状況から来日直前にフェルジャウイ博士が、チュニジア考古学研究所長になられたため欠席となった。他の4名は来日して講演をおこなった。国内からは泉拓良（京都大学）、岡田保良（国士舘大学）、宮坂朋（弘前大学）、小方登（京都大学）、辻村純代（国士舘大）、佐藤育子（日本女子大学）がシンポジウムに参加した。

第1日は、「地中海地域フェニキア・カルタゴ遺跡の最近の発掘成果」をテーマとする一般向けの公開シンポジウムで、「チュニジアのフェニキア・カルタゴ遺跡の発掘」佐藤学術研究員、「シチリアのフェニキア・カルタゴ遺跡の発掘」ファルソーネ教授、「南レバノンのフェニキア遺跡」バダウイ准教授、「レバノン・ティール遺跡、最近の発掘成果」シクラウイ調査官、「ティール市近郊ラマリ遺跡の発掘」辻村研究員が講演をおこなった。とくに、レバノン・ティール周辺の発掘調査やシチリアでのフェニキア・カルタゴに関する発掘調査が近年大きな成果を上げていることが紹介され、研究や議論の基礎となる発掘調査成果を共有できた。約100名の出席者があり、フェニキア・カルタゴへの興味が、一部の研究者だけに限られたものでないことを感じられた。

第2日は、研究者向けの公開研究討論会「フェニキア・カルタゴの都市生活と信仰」をおこなった。午前中は「フェニキア・カルタゴの都市と建築」をテーマに、「地理学からみたフェニキア・カルタゴの都市」小方教授、「フェニキア・カルタゴの建築遺構の特徴」岡田教授が発表をおこない、活発な議論をえた。午後からは、「フェニキア・カルタゴの墓制と宗教」をテーマに、「フェニキアとカルタゴの宗教」佐藤学術研究員、「カルタゴの墓制と宗教（タニット女神記号から）」泉教授が講演をおこなった。専門的な課題であったが、熱心な討論がおこなわれ、国際シンポジウムとしての成果を上げることができた。